

## 社会体育実習授業に関する調査

森 喬夫 浦田 憲二 太田 あや子 文谷 知明 河合 一武

杉山 仁志 桂 和仁 星川 秀利 浜田 琴美

### On the survey of students of internship in sports business

Mori Takao, Urata Kenji, Ota Ayako, Bunya Tomoaki, Kawai Kazutake,  
Sugiyama Hitosi, Katura Kazuhito, Hoshikawa Hidetoshi, Hamada Kotomi

#### Abstract

The purpose of the this paper is to clarify our students needs to course of internship in sports business. Students responded to questionnaire, which has 20 items.

We examined the results.

- 1 Many student want to get information of their enterprises which accept them before their pracuticum.
- 2 Many students are satisfied with their internship and they recommnded this course for their juniors.

Key Word : internship, course evaluation

キーワード：授業実践，学外実習，選択授業，インターンシップ，授業評価

#### I はじめに

学生が実社会に出る前に会社等で実習生として現場での就労体験を積むインターンシップ（現場実習）が注目されている。インターンシップは「学生が在学中に自らの専攻，将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」（「インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会」報告（以下研究会報告と称する））と定義される。大学外に出て実社会に触れることは，学生が各自の適性を考えたり仕事の内容を理解したりすることにより職業意識を持ち，将来の職業選択に有効に働くと考えられている。いっぽう，受け入れ側企業にとってもこの実習は採用を前提とはしていないが将来的に見た人材育成・確保，産学協同を視野に入れた大学との連携の確立，情報交換

や交流の機会増大などの利点がある。また，大学にとっては，学生の教育や職業指導に役立ち，大学の人材育成に対する社会的評価を得て入学者へアピールしたり，企業と交流したりする機会として有効である。

本学健康・体育専攻においても2年次前期に「社会体育実習」の授業があり，夏季休業期間に数十の施設の協力を得て学外での現場就労体験実習を行っている。この授業は平成10年度までは必修科目であったが，平成11年度から選択科目となり，資格取等にも関与しない純粋な選択科目として2年次の専攻学生の約3分の2にあたる約100名が履修している。

本稿は「社会体育実習」の授業で学生が何を学び，何を得ているかを知ると同時に，実習事前事後の学生指導の基礎資料を得ることを目的に実

施した調査結果をまとめたものである。

## II 社会体育実習の授業概要

社会体育実習の授業概要は以下の通りである。健康・体育専攻 2 年生対象で、2 単位、事前事後の学内授業が 5 回と、学外での現場実習が夏季休業中に 10 日から 2 週間の日程で行われる。学外の実習先は大学側が提供する実習先の中から、基本的には学生が希望する業態の実習先を選び、教員が各実習先へ連絡をとって受け入れ先を決定する方法をとっている。

実習先所在地は北海道から九州までの広い範囲にわたっており、近年学生の出身地での実習が増加する傾向にある。学内での授業は事前 4 回、事後に 1 回の計 5 回実施されている。学内授業や連絡等の学生指導には健康・体育専攻の専任教員 9 名があたっている。指導教員は実習先との連絡、学生の事前指導や情報提供、学外実習中の訪問指導、事後の実習日誌の評価等を担当する。

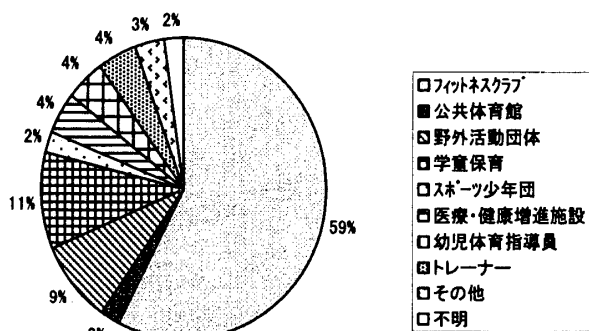


図 1 受け入れ実習先 (n=88)

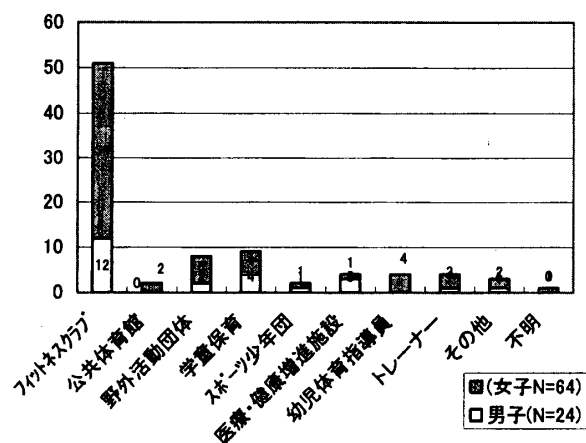


図 2 実習先 (性別実数 N=88)

## III 調査方法

社会体育実習に関する質問紙調査(20項目 63項目)を、2000年9月の最終授業時に実施した。回答数は 88 名(実習参加者の 92.6%), 男子 24 名, 女子 64 名であった。

## IV 結果

### 1. 社会体育実習の実状

#### 1) 受け入れ実習先

平成 12 年度の実習先は図 1, 2 のとおりで、59%の者が民間のフィットネス(スポーツ)クラブで一番多く、学童保育(11%), 野外活動団体(9%)と続き、医療・健康増進施設と幼児体育指導員、トレーナーがそれぞれ 4%, スポーツ少年団と社会福祉施設が 2%であった。全体の 74%の者が第一希望の実習先で実習を行っている(図 3)。

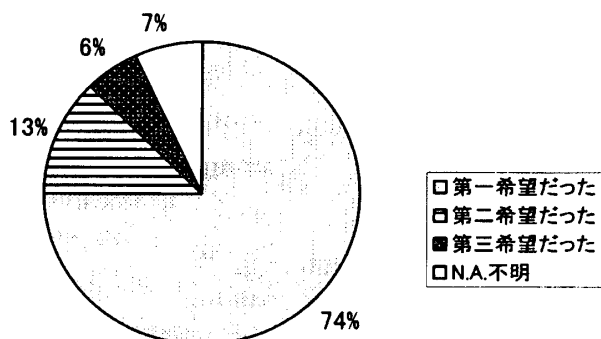


図 3 実習希望先順位 (N=88)

#### 2) 実習先選択理由

実習先の選択理由として用意した 7 項目について「あてはまる」と答えた者についてまとめたものが図 4 である。実習内容で選んだとする者は全体の 81%でもっとも多く、ついで就職や職業選択のためが 62.5%, 家から近いことが 48.9%となっている。教員や先輩などの人の勧めは 12.5%とそれほど多くはなかった。

#### 3) 実習時期

実習時期は、7 月下旬から 8 月上旬にかけての者が 31%ともっとも多く、ついで 8 月上旬か

ら中旬にかけて (26%), 7月中旬から下旬 (22%) となっている。小学校等の夏季休業が始まる7月下旬に実習を行っている者が約半数にのぼっている (図5)。

4) 実習の形態

実習形態は、毎日実習先に通う「通い」の実習形態が85.0%と最も多く、ついでキャンプ場などの野外活動施設に宿泊する「現地滞在宿泊」型11%であり、そのほかに子どもを引率して宿泊する形態や、通いと宿泊の混合型がみられる (図6)。 それら実習先への移動にかかる時間は30分以内の者が半数をしめる一方で、1.5~2時間の者もある (図7)。

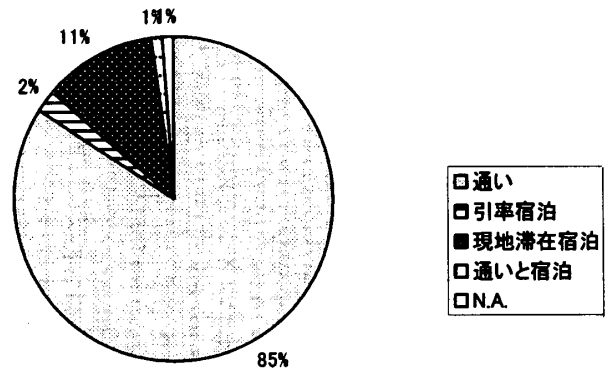


図6 実習参加形態 (N=88)

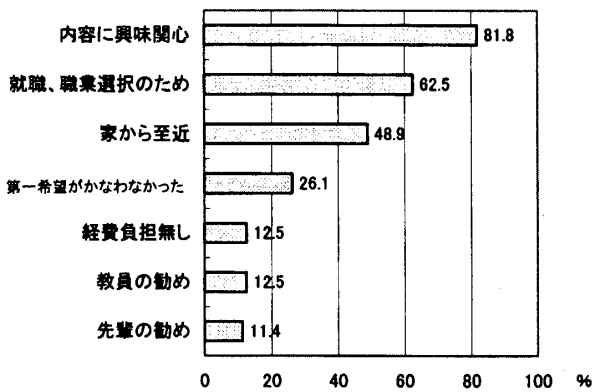


図4 実習先を選んだ理由 (複数回答 N=88)

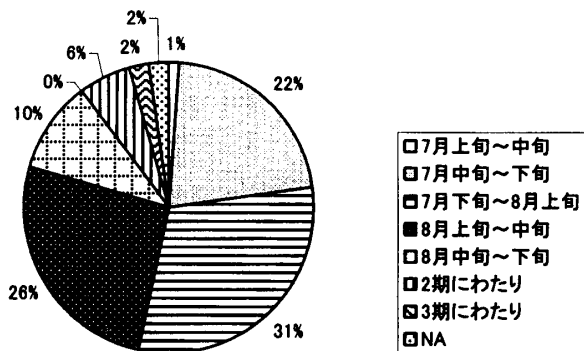


図5 実習時期 (N=88)

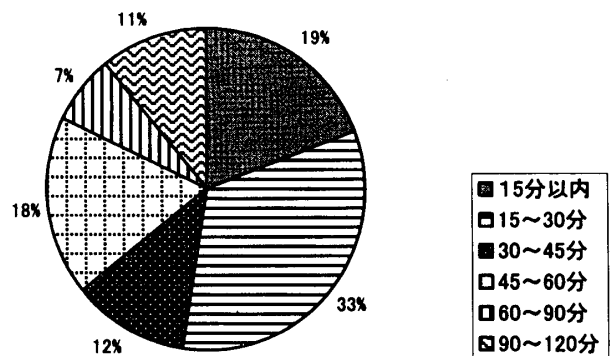


図7 実習先への移動時間 (N=84)

5) 実習内容

実習内容は実習先により多様であるが、もっとも多いのがアシスタントも含めた「実技指導」であり全体の70.5%にのぼる (図8)。ついで実習先での様々なプログラムに参加する「プログラム体験」(55.7%), 清掃や備品の整理等の「施設設備管理」(54.5%), 施設のフロントでの「受付」業務 (29.5%), 書類整理やコンピューターへのデータ入力・データ整理, 指導記録コメント記入などの「事務的作業」(23.9%), 子どもの躰などの「生活指導」(17.0%) があげられている。

また、実習施設別にみると、フィットネスクラブでは先の上位3位までの実習内容が多く、学童保育では生活指導が多いことがわかる (図9)

6) 実習経費

86%の者が何らかの経費の負担しており (図10), そのうちの34%がその金額を「高い」としている (図11)。主たる経費は実習先への交

通費や食費で、最高額はそれぞれ2万円、1万5千円である。それ以外に宿泊費4万5千円が最高額としてあげられている。経費の負担金額は実習先によってかなり幅がある。本年度に関しては、企業スポーツの合宿先へ宿泊するトレーナー実習がもっとも負担金額が多く、野外活動施設では宿泊費は実習生が負担することはなかった。

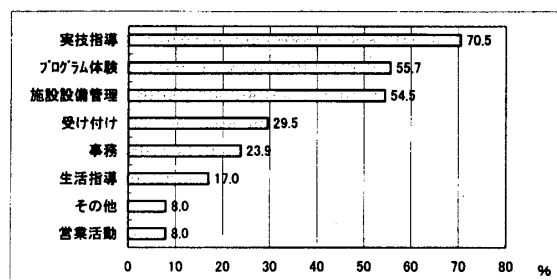


図8 実習内容 (複数回答 N=88)

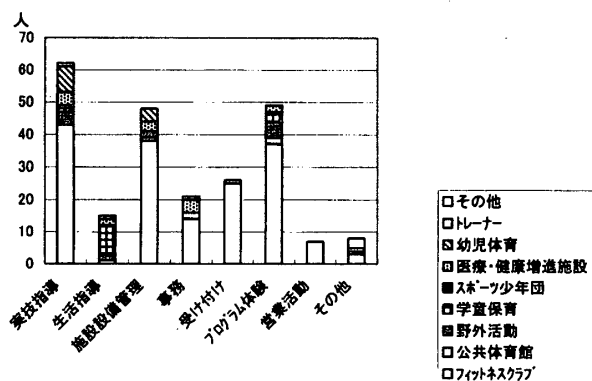


図9 実習先別実習内容 (複数回答 N=88)

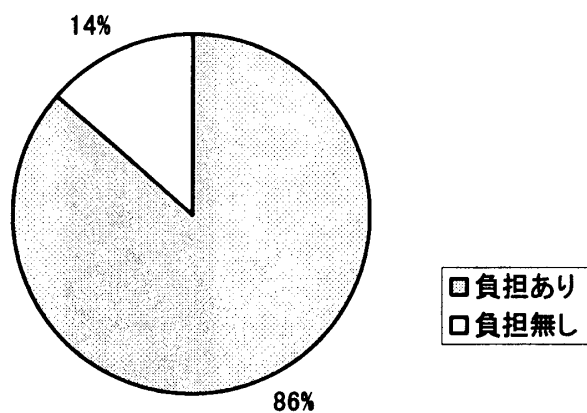


図10 経費の個人負担 (N=88)

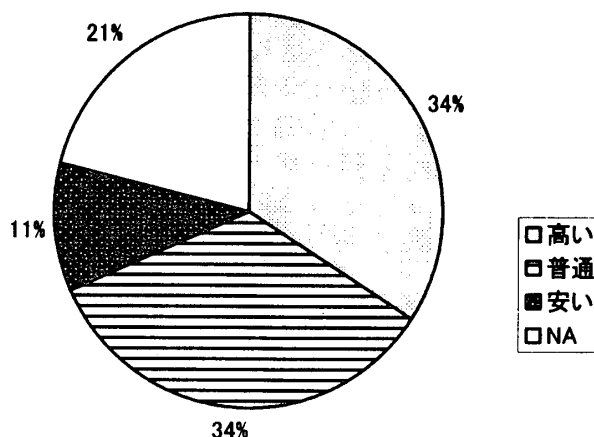


図11 経費負担感 (N=76)

## 2. 事前授業に関する項目

学外実習へ出る前に履修者全員を対象に事前の授業が4回行われた。第1回目と第2回目は実習先へ提出する関係書類の作成を中心とした内容で4月に、第3回目は実習ノートの記入方法や実習先との事前打ち合わせや実習中の諸注意の説明等を6月末に、第4回目はマナー研修と題して社会人としての実習先での行動の注意点やマナーについてフィットネスクラブ産業界(本年度は株式会社ピープル人事部)から外部講師を招いて講演を7月に行っている。また、それ以外に、実習先別に担当教員が学生に個別に指導する個別指導が適宜行われた。

### 1) 学生による学内事前授業の評価

これら事前の学内授業が実習に役立ったかどうか学生の評価をまとめたものが図12である。3項目全てについて約4割の学生が「役立った」として、外部講師によるマナー研修(46.6%)、教員の個別指導(43.2%)、全体指導(37.5%)の順であった。これら授業を実施しているものの、実習の事前情報については18%しか「十分であった」としていない(図13)。

### 2) 学生の事前準備状況

学生本人の事前準備状況についてまとめたものが図14である。学生の準備状況は十分とは言えず、就職や職業選択について考えた者が28.4%、具体的に実習に必要な技能や知識を学ぶ努力をしたとする者は23.9%、自ら実習に関

する情報を手に入れようとした者は 4.5%であった。

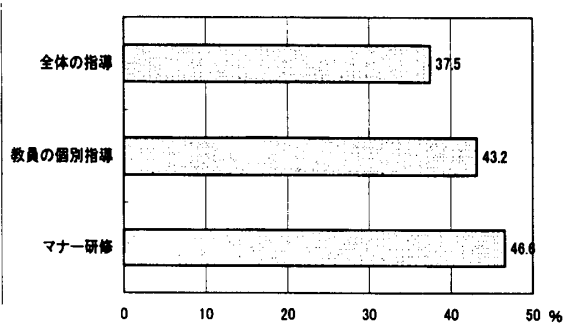


図 12 役に立った学内授業 (複数回答 N=88)

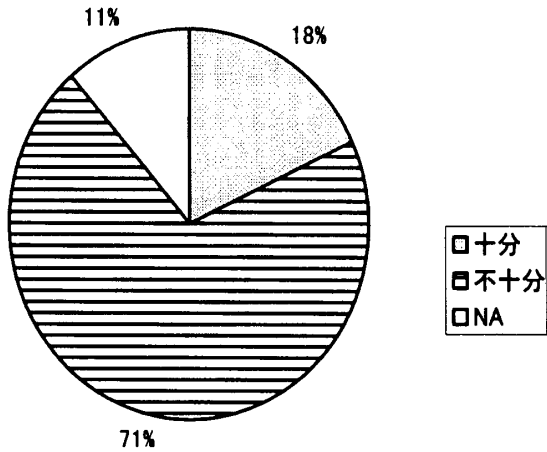


図 13 事前情報は十分か

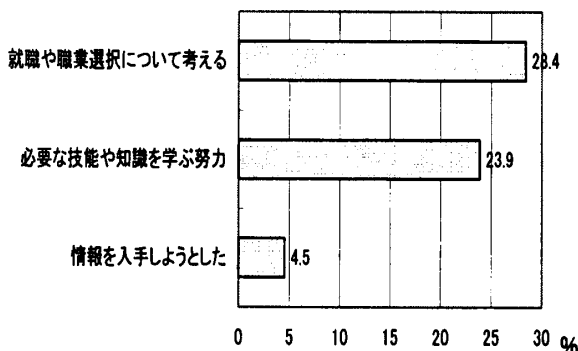


図 14 学生事前準備 (N=88)

### 3. 実際の実習に関する項目

#### 1) 実習中に努力したこと

実際の実習中に学生が努力した事項についてまとめたものが図 15 である。最も多くの者が努力したことは「素直な態度で実習に臨む」(97.7%)であった。ついで「挨拶をする」

(94.3%), 「時間を守る」(93.2%), 「わからない事は聞く」(87.5%)であった。この4項目は事前の授業や学外講師からも指導があった事項である。他の「健康に留意する」や「実習日誌を毎日提出する」の項目についても78.4%が努力したとしている。

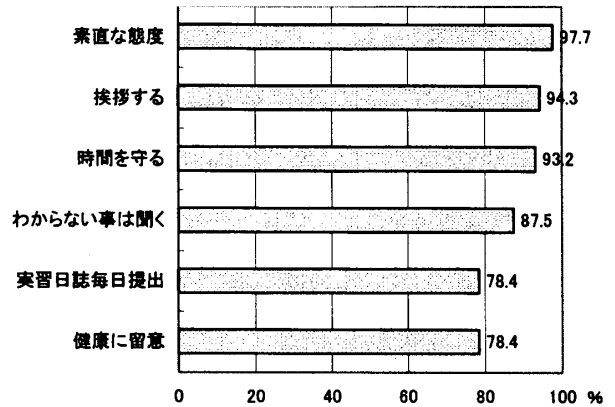


図 15 実習中に努力したこと (複数回答 N=88)

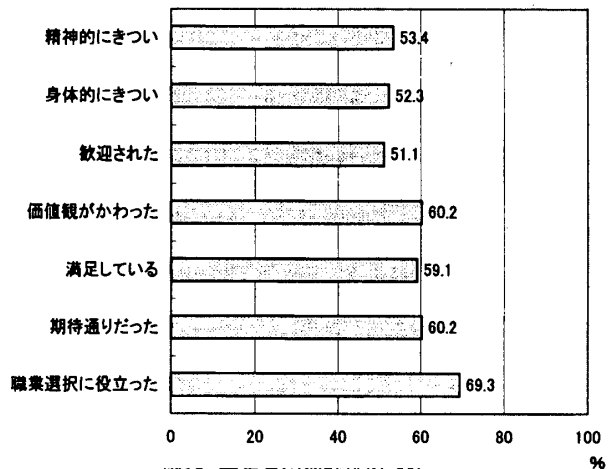


図 16 学生の実習評価 (N=88)

#### 2) 学生による実習の評価

実際の実習に対する学生の評価を図 16 にまとめた。53.4%の者が実習は精神的につらかったとし、52.3%の者が肉体的につらかったとしている。約半数 (51.1%) の学生が実習生としての自分が実習先に歓迎されたと感じている。69.3%の者が実習は「職業選択に役立った」と評価しており、約 6 割の学生が実習は期待通りで満足を得、価値観が変わる影響を受けたとしている。

#### 4. 後輩へのアドバイス

86%の学生が社会体育実習の授業の履修を後輩に勧めるとしている（図17）。

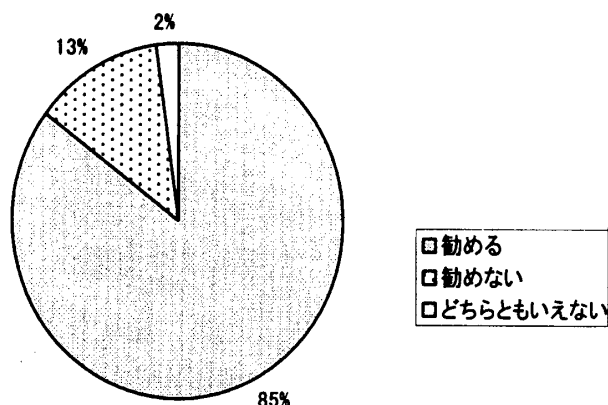


図17 社会体育実習を後輩に勧めるか (N=89)

### V 考 察

調査結果から今後の実習指導への課題をまとめると以下ようになる。

#### 1. 履修学生の意識の向上

学生の職業意識の啓発は効果的な実習に欠かすことができない。研究会報告によれば、インターンシップ受け入れ企業が受け入れる学生の条件として「明確な目的意識・参加意識」を一番に（88.8%）、次に「業界への関心」（66.4%）といった項目をあげている。これは他の「専門知識」（40.8%）や「履修科目や成績の内容」を上まわっている。

本調査の結果から社会体育実習を履修した学生の多くは、実習先の業務内容に興味関心があり、職業選択のためにという意識を持っていることがわかる。また、実習時には素直な態度や挨拶すること、時間を守る、わからないことは人に聞くなど社会人としてのマナーに基づいた行動を心がけていて、精神的肉体的な困難さを感じながらも多くのことを学んでいることがわかる。その結果86%の者が後輩に履修を勧めるとして。しかしながら実習への満足度が約6割とそれほど高くないことからその原因を探っていく必要がある。

学生の動機づけをより高め、満足度の高い効果

的な実習にするためには、学生の希望と適性を把握し、協力施設の情報を収集し、本人と実習先とのミスマッチを回避した第一希望がかなう実習先を今後も確保・提供する必要がある。また、この授業の履修および実習先希望を決定する1年次後期の授業ガイダンスの果たす役割も大きいと考えられることから、より一層の指導の充実も重要であるといえる。

#### 2. 学内での事前事後指導の充実

事前事後の学内の指導の充実も短期間の効果的な実習に欠かせない。報告書は学内における授業に実習先の現状やニーズを反映させて、実習成果を教育へフィードバックして実習と学内教育との連続性を保つ必要性を指摘している。本調査の結果から、学内での実習のための事前指導は十分とは言えず、学生自身も積極的に情報収集や実習のための準備をしているとは言い難い状況が理解された。実習先が多岐にわたり、施設の実情も実習内容も多様なため、全体指導だけでは十分な指導は難しい。そのためには教員の個別指導の充実とともに、当該授業以外の学内における他の授業との関連性を持たせることも必要であろう。今までの学習の成果を生かし、学生自らが実習先の情報や実習に関する知識や技能をインターネットや書物、先輩などから入手する方法の確立、その指導なども急務であると考えられる。

### ま と め

開学10年を経ようとする本学における、社会体育実習授業は学生のみならず大学にとっても非常に有効で意義深いものである。本調査の結果から授業の改良点や学内と連携した指導の充実が示唆された。

### 参 考 資 料

文部省(1998)インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会報告